



Newsletter

No. 13 March 2014

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

南米の日本、チリ

こちらサンティアゴは3月に入ってぐっと秋に近づき、日中はまだ暑さが残るものの朝晩は10度近くまで下がって肌寒さを感じるようになってきました。

日本では「チリ=常夏」という誤ったイメージを持っている方が多いようですが、首都サンティアゴは南緯33度で東京の北緯とほぼ変わりません。そのためサンティアゴにも四季があり、季節ごとに草木や旬の食材の移り変わりを楽しむことができます。

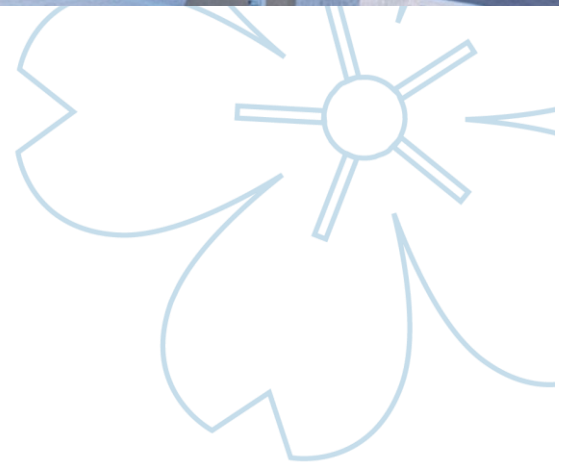
その他にも日本とチリとの共通点は探してみると意外と多いもので、例えばチリの国民性は勤勉、真面目な人が多く、「南米の日本」と称されることもあります。(日本が勤勉の代名詞のようで、ありがたいお話です。)またチリ人は、南米では珍しくシャイな一面があったりします。一説によるとチリは周囲を海と山に囲まれた地形で陸の孤島ようになっており、島国日本と似ているためとも言われています。

食事の面では海が近いため海産物が豊富に採れます。市場に行くと多くの魚介類が新鮮なまま売られていて、賑わった様子はさながら築地市場のようです。海産物は輸出も盛んで、日本でチリ産サーモンを目にしたことがある方も多いかもれません。

しかし、共通点で最も忘れてならないのは地震でしょう。日本と同様にチリも長きに渡り地震による被害を受け、悩まされてきた歴史があります。つい先日の3月16日にもチリ北部でマグニチュード6.7の地震があり、幸い大きな被害は出なかったものの、改めて地震大国であることを実感させられました。

日本人にとっては似ている点が多く住みやすいと言われるチリ、もちろん異なる点の方が圧倒的に多く国際協力は困難な道のりではありますが、時にはこんなアイスブレイクも駆使しながら業務に励んでおります。

岡田 卓也 LACRC 食道・一般外科学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
TMDU派遣団の活動報告	4
プロジェクトセメスター	7

PRENECの進捗状況

既にサンティアゴ、プンタ・アレナス、バルパライソで開始されているPRENECは、LACRCスタッフの積極的な参加により順調に参加者数を増やしています。本年は更に3都市の新規参加が予定され、参加者の増加に備え環境調整を進めております。

第3回PRENEC国際コースを開催

2014年1月10日、ブラジルでの大腸癌検診のパイロットプロジェクト開始のための講習会が開かれ、本学訪問団、LACRCスタッフ、CLC大腸肛門科とブラジル側関係者が参加しました。チリにおける経験をもとに、啓蒙活動、便潜血検査、データの取り扱いなど、具体的な項目に関する講習を行いました。特に便潜血検査については、江石教授が本物のキットを用いて自ら説明を行いました。

両国における大腸癌検診プロジェクトの発展のため、TMDUとチリ、ブラジルで協力体制を継続していくことを確認致しました。



ロペス医師によるプレゼンテーションの様子



コースの様子



便潜血キットの説明をする江石教授



プレゼンテーションをするボンセ看護師(チリPRENECコーディネーター)

コキンボ・オソルノ協定書調印式

PRENECは現在、サンティアゴ、プンタ・アレナス、バルパライソで進行しております。2014年1月13日に、新たにコキンボのサン・パブロ病院、オソルノのサン・ホセ病院が拠点病院として正式にプロジェクトに参加する協定がそれぞれの病院と本学、およびCLC間で締結されました。

調印式には、各病院を所管する州の保健局長、拠点病院長、CLCからは病院長、医師会長、ロベス医師、本学からは江石教授、吉田教授、内田技官、LACRCスタッフが参加し、今後の協力体制について会談致しました。2014年5月よりコキンボでは2年間で3000名、オソルノでは半年で1000名を対象としてPRENECを展開していく予定です。



コキンボ関係者らと



オソルノ関係者らと



コキンボの拠点、サン・パブロ病院



オソルノの拠点、サン・ホセ病院

TMDU派遣団の活動報告

本学の江石義信教授、吉田丘特任教授、内田技官からなる訪問団が、本年1月8日から14日まで、チリ共和国に滞在しました。

今回の訪問では、現在進行中のチリにおける早期大腸癌診断・治療に関する活動や、内田技官らによる現地研究員への技術指導のほか、チリ大学と共同で設置するジョイントディグリープログラム構想や、チリ・オーストラル大学との協定、またCLCとの看護領域研修・肺癌スクリーニングプロジェクトに関する協定など、学術的な面でも多くの成果が得られました。

オーストラル大学との学術協定締結

サンティアゴの約810km南に位置するLos Rios州の州都であるバルディビアは、開拓から492年の歴史を持つ緑豊かな街です。チリにおける水産業の拠点としても知られ、日本からの技術援助の歴史も長く、親日家の多い土地柄としても知られています。またドイツ系移民が多く生活しており、チリを代表するビール「Kunstmann」(写真左下)の生産地としても知られています。バルディビアには、医療系学部を擁するオーストラル大学のメインキャンパスが置かれています。

今回、オーストラル大学の要請により、本学とオーストラル大学との間に学術協定が結ばれることとなりました。本協定により、両大学間での共同研究や本学教官・研究者による技術指導、交換留学制度などが将来的に実現する見込みです。本協定の調印式が、2014年1月13日、サンティアゴ医師会館にて執り行われました。オーストラル大学からは、Cubillos学長、Montt理事長、Flores医学部長らが臨席し、本学からはチリ出張中の江石教授、吉田教授、内田技官およびLACRCスタッフが参加いたしました。また、在チリ日本国大使館より、山口書記官にも御臨席頂きました。

オーストラル大学は、本年PRENECが開始される予定のオソルノ市にもクリニカルキャンパスを持ち、大腸癌早期診断プロジェクトにおいても協力予定ですが、本協定が結ばれたことから、学術研究面においても本学のチリにおける活動がさらに充実することが期待されます。



オーストラル大学Cubillos学長と江石教授



左より吉田教授、江石教授(TMDU)、山口書記官(在チリ日本国大使館)、Cubillos学長、Flores医学部長(オーストラル大学)

在チリ日本国大使館・JICAチリ支所表敬訪問

在チリ日本国大使館およびJICAチリ支所を訪問し、PRENECの進捗状況や、南米各国への今後の展開、ジョイントディグリープログラム構想等の報告を行いました。



在チリ日本国大使館にて村上大使との記念撮影



JICAチリ支所訪問の様子

ジョイントディグリープログラムに関する協議

本学では、チリにおける大腸癌スクリーニング分野に対する協力・支援の実績を基にした人材育成の一環として、チリ大学医学部及びCLCと共同で運営する大学院ジョイントディグリープログラムの設立を検討しています。昨年8月にTMDU訪問団とチリ大学代表団との間で基本的な合意がなされましたが、今回はさらに具体的なカリキュラム作成のための協議が行われました。

本協議により、ジョイントディグリープログラムは2016年度から開始することを目標とすること、消化器内科、消化器外科臨床医を対象とし、2年間の専門的技術トレーニングと3年間の基礎研究を組み合わせた5年間のコースとすること、などが合意されました。今後はさらに具体的なカリキュラム作成や、開始に必要な設備・機器の検討などが進められる予定です。



協議の様子

看護領域研修・肺癌検診プロジェクトに関する協議

チリの平均寿命は男性76歳、女性82歳であり、高齢者の割合が徐々に増加しつつあります。CLC看護部では、高齢者介護体制を充実させることを目標のひとつとしており、同分野で多くの経験を有する日本から高齢者看護・介護を学びたいという希望が示され、本学訪問団とCLC代表団との間で協議が行われました。

今後本学としてどのような協力が可能か関係者と慎重に協議を重ね、将来的にチリの高齢者医療への貢献が実現することが期待されます。

また、チリにおいて大腸癌は増加傾向にあり、本学は早期発見のためのプロジェクトに参加しているところですが、チリ保健省が発表している癌死亡率統計(2011年)では胃癌は男性で第1位、女性は乳癌に続いて第2位、肺癌は男女とも3位です(大腸癌は男性で4位、女性で5位)。大腸癌のみならず、胃癌、肺癌等に対する早期発見システムの確立が求められています。

CLC呼吸器外科のクラベロ医師らは、チリ保健省を通じて公的な肺癌検診プログラムの計画を進めてきましたが、日本の画像診断技術を取り入れたいという強い希望があり、チリにおける肺癌検診

プログラムの実現に向けて、本学および富士フィルムが協力していくことが合意されました。

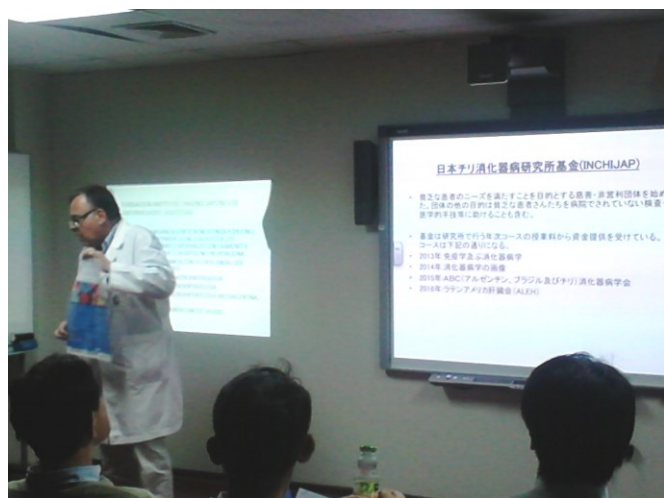


クラベロ医師らとの肺癌検診プロジェクトに関する協議

国立サン・ボルハ・アリアラン病院訪問

2014年1月8日、TMDU派遣団とLACRCスタッフがサン・ボルハ・アリアラン病院を訪問しました。日智消化器病研究所所長のエステラ医師より、長年に渡るTMDUとの協力関係の歴史や近年の同研究所の成果について、日本語の資料を用いたご説明を受けました。また現在のLACRCの活動に対する感謝の意を頂戴しました。

TMDUとサン・ボルハ病院との関係は40年以上に渡り、チリでの胃癌や大腸癌診断技術の向上に貢献して参りました。現在はサンティアゴで展開されているPRENECにおいて、内視鏡検査の基幹病院となっております。今後も双方の発展のため協力関係を維持することを約束致しました。



エステラ医師によるプレゼンテーション

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。昨年10月8日に4名の学生がチリに到着し、うち3名がCLC、1名がチリ大学の研究室に所属しました。学生達は課程を終え、本年2月に無事帰国致しました。本号では、派遣学生のチリ滞在記をお届けいたします。

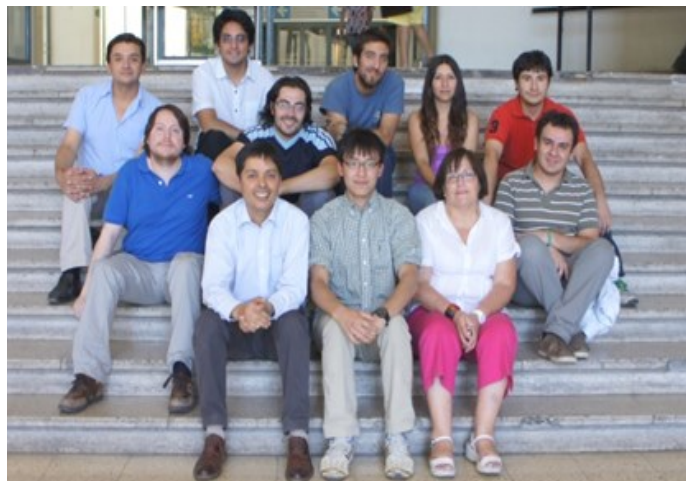
¡VIVA CHILE!

川田大介 チリ大学医学部統合生理学研究室所属

私はチリ大学医学部の統合生理学研究室で腎臓の疾患の研究をしていました。この研究室は過去数年医科歯科生が派遣されてきた研究室とは違い、私が初めて派遣される研究室でした。どういった研究室で何ができるのか分からなかったのが、却ってわくわくし、目いっぱい研究を楽しんでやろうというつもりで臨みました。研究室でまず感じたのは、研究室全体のモチベーションの高さと、教育熱心さです。教授は毎日メンバー一人ひとりと話して研究の調子を聞いて回り、時には長時間に渡って議論していました。私も何度も鋭い指摘を受け、非常に刺激的でした。また、教育目的で、毎週研究員数名が論文を読んでそれを自分でやったかのようにプレゼンテーションさせる練習の場が設けられていました。私も指導教官の前でそういった練習をする機会をいただき、大変勉強になりました。加えて、メンバーみんなの優しさ、親しみやすさを強く感じました。いつも、たわいもない会話を投げかけてくれたり、困った様子を見せるとすぐに助けてくれたりと、皆親切で本当に楽しく明るい雰囲気の中で研究生活を過ごすことができました。研究室の皆さんとの写真を載せましたが、最終日には、わざわざ集合写真を撮る時間を設けてくださいました。ラテンといえば陽気で楽天的で、それは仕事や勉強においても然りというイメージがありますが、実はチリの国民性は、他のラテン諸国に比べると楽天的な気質が薄く、堅実で勤勉ということがよく言われます。私の周りの人達は本当に真面目で、また常に私を気にかけてくれて、良い環境に恵まれました。

チリでプロセメをやる意味についてですが、一つには日々新たな人的交流があったことを挙げたいと思います。研究室ではもちろん、チリの友人や生活の中で関わる人は皆、アドバイスをくれ、たわいもない会話をすることに非常に積極的になってくれたおかげで、研究や日常生活を楽しんで過ごすことができました。逆にそうしたラテンの明るさに触れることで、自分たちからも動こうという気分になされました。また、未経験なことに対しては、なるべく断らずに色々挑戦してみようという心構えで常にいましたが、これは正解でした。研究室で、「〇〇の実験見てみたいかい？」と聞かれたら必ず「Yes!」と言ってついて行ったり、友達に「〇〇に行ってみない？」と誘われたらできる限り「¡Sipo!」(チリ特有の「Si」)と言って参加したりと、とにかく色々やってみようとしたことで毎日が刺激的になり、研究・日常生活ともに楽しめました。

休暇では、沢山旅行もしました。旅行して実感したのは、同じラテンといえども国によって雰囲気・人の話し方・生活様式などに違い



研究最終日、研究室のメンバーと



チリの南部パタゴニアのトレス・デル・バイネ国立公園にて

があること、旅行先で会話を交わす相手とどうすれば仲良くなるかを少しでもつかめたこと、日本人らしくあまり人に話しかけないのではなく、ラテンの人に対してラテンのノリで接するとお互い会話を楽しめるということ、相手の反応はこちらの態度で変わることはどの国でも同じであることなど、多くの景色を楽しめただけでなく、人的交流も深められた気がしました。このチリでの素晴らしい勉強の機会を与えてくださった江石教授をはじめ医科歯科の先生方、LACRCの河内先生、岡田先生、小林先生、ハイメさま、ご支援いただいた教務課の方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。また、チリで出会った皆さん、お世話になりました。今後の糧となる貴重な経験をありがとうございました。¡VIVA CHILE!

地球の裏側で得たもの

吉岡義朗 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究所所属（前立腺癌）

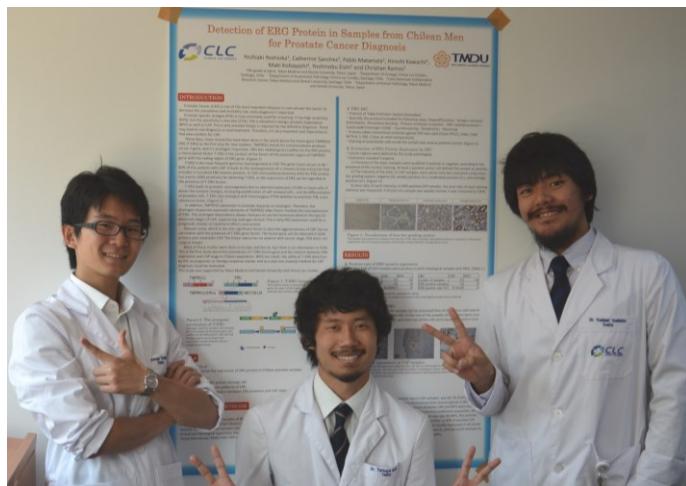
私は現在、CLCの研究室で前立腺癌の新たなマーカーを発見・開発するための前段階として、ある融合遺伝子が前立腺癌の中に発現しているかどうかをチリ人から採ってきたサンプルを用いて実験で確かめています。世界的にホットなトピックなのですが、残念ながらチリ人に関するデータは存在せず、その意味で私の研究はチリでの最初の実験とも言えます。実際にとっても有用なデータが出てきており、とても誇らしい気分です。

この流れのまま、まずは研究生活についてお話させていただきます。CLCはチリでもトップクラスの病院であり、私立の病院なのでとても大きくとても綺麗です。しかし、私たちが所属し研究を行っているラボは、病院からは歩いて3分ほどのやや離れた場所にあり、最初に訪れた際は目を疑いました。というのも駐車場のはずれにポツンとたたずむ童話にでも出てきそうな小屋だったからです。臨床現場との距離を（物理的にも）少々感じております。また、研究室は9割方女性が占めており、中高6年間を男子校で過ごし、大学でも基本的に男同士でむさ苦しく過ごしている私にとってはとても新鮮です。4ヶ月目にしてスペイン語が一向に話せるようになっていない私ですが、みなさん親切に英語でコミュニケーションをとって下さり、大変お世話になっております。

さて、続いては研究室以外でのチリでの私生活に関して述べさせていただきます。日本とは地球のちょうど裏側に位置しており、そのためチリは現在夏真っ盛りです。10月に到着した頃はまだ春で、肌寒い日もしばしばあったのですが、今では最高気温が35℃を超える日が多く、お正月も半袖で過ごし、なんだか不思議な気分です。日本の夏といえば湿度が尋常でないほど高く、個人的には「溶ける」という表現がぴったりだと思うのですが、こちらの夏はカラッとしており全く不快ではありません。ただし、太陽がさんさんと照っており、紫外線も日本の6倍というデータもあるほどで、まさしく「焼ける」あるいは「焦げる」といったところでしょうか。そんな暑さの中、週に2~6回ほど剣道をしております。こちらの剣道のレベルは予想に反してとても高く、非常に楽しめております。チリのナショナルチームの面々とても仲良くなり、稽古に飲み会に精を出しておる次第です。12月にはチリ選手権が開催され、私も選手・審判として参加しました。個人戦に出場して優勝してくるのが目標だったのですが、残念ながら国籍の問題で団体戦のみの出場でした。チームはすぐに負けてしまったものの、地球の裏側でこうして「交剣知愛」が実践できたことをとても嬉しく感じております。驚くべきは、ナショナルチームの選手たちは皆英語がとても流暢だということです。おかげでコミュニケーションには事欠かず、英語力も向上しておりますが、ただ裏を返せばそのせいで私のスペイン語は何一つ上達しておりません。これは現地学生との交流の際にも言えることです。こちらで日本語を勉強している学生と交流を持つ機会があり、友人がたく



チリ選手権にてチームのメンバーと



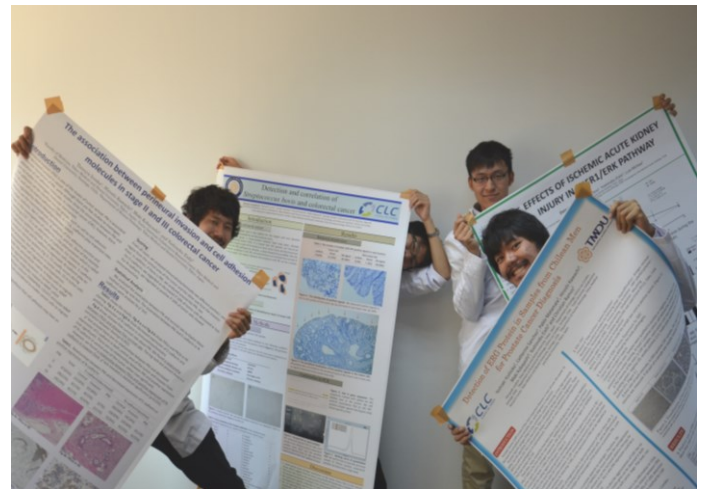
チリでの研究成果発表会終了後

さんできたのは良いのですが、なぜか会話は英語か日本語で行われ、彼らが教えてくれるスペイン語といえばチリでしか通じないスラング（しかも相当劣なもの）ばかりで、私は早々にスペイン語の習得を諦めました。代わりに英語力をつけようと心に決め、積極的に英語を使っていたところ、来た当初はアルカイックスマイルでたえずずっと聞いていたのが、今では対等に会話できるまでになりました。日本に帰ってからもキープしたいものです。

派遣学生同士も野郎ばかり4人、とても仲良くやっております。「せっかく30時間もかけて南米まで来たのだから他の国にも行かなきゃ損！」というモットーのもと、マチュピチュ（ペルー）やウユニ塩湖（ボリビア）、サンパウロ・リオデジャネイロ（ブラジル）、ブエノスアイレス（アルゼンチン）と、時間を見つけては旅行に行っております。

国や街によってそれぞれの雰囲気やカラーにかなりの違いがあり、行くたびに視野が広がり、人間的にも成長できているように(勝手に)感じております。また、毎回の旅行でチリの先進国具合や治安の良さをまじまじと実感します。ただそんな「南米＝安全な国」でも日本と比べれば格段に危なく、心のどこかに生まれていた油断が財布をすられるという悲劇をもたらしたのは自明の理と言えるでしょう。日本がいかに安全か、そしてそれをいかに当たり前と考えがちかを身をもって実感させられた一件でした。

最後に、こうして異国の地で研究生生活を円滑に送ることができたり、人として成長することができたり、かけがえのない友人と出会えたりしたのも、すべては現地スタッフの先生方をはじめ、医科歯科大学のたくさんの方々のご尽力があったからこそです。言葉では到底表現できませんが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。残り1カ月弱、悔いの残らないよう、何事にも全力で取り組む次第です。嗚呼、帰りたくない。



発表ポスターと学生達

20,000km、 海の彼方で

柳平貢 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属（大腸癌）

先日、私はChileでの研究の最後のプレゼンテーションを終えました。研究生生活も一段落した今、午後9時になっても沈まない太陽を眺めながらこの文章を書いています。

私が研究しているラボは、Clinica Las Condesと呼ばれる大きな病院の一角にあります。そこで私は大腸がんと腸内細菌の関連をテーマに、この3ヶ月間研究を行ってきました。私の所属するラボのメンバーの大半は女性で、研究室は毎日とてもにぎやかです。毎日スペイン語で話しかけて頂いているお陰か、スペイン語を聞き取ることに少し慣れてきました。ですが私が何か話そうと頭の中で動詞を活用させていると、彼女達はもう次の話を始めています。彼女達と渡り合うためには、まだまだ話す鍛錬が必要です。

研究の議論は英語で行っています。研究開始直後は、進捗報告や今後の方向性などを話す時に専門用語が全く分からず、本当に苦労しました。例えば、「centrifuge（遠心分離する）」と言いたい時に単語が思いつかず、指導教官の前で腕をぐるぐる回して説明した事もありました。そんな苦い思い出もありましたが、今では稚拙ながら英語での議論にも慣れました。私の指導教官はDr. Gonzaloで、大変スマートで教育熱心な方です。彼は私が立てた実験計画について親身になって議論して下さい、また必要な試薬や機材を話すとその場で手配して下さい。今回のプロジェクトセメスターでは本当にお世話になりました。

研究室の外でも、たくさんの親友に出会うことができました。特にSantiago大学の日本語専攻の学生とは交流が深く、お祭りやBBQ、買い物など多くの時間を共に過ごしました。帰国を1ヶ月後に控え、最近ではあちこちでお別れ会を開いてくれます。「チリで医師をやった



雨上がりのマチュピチュにて



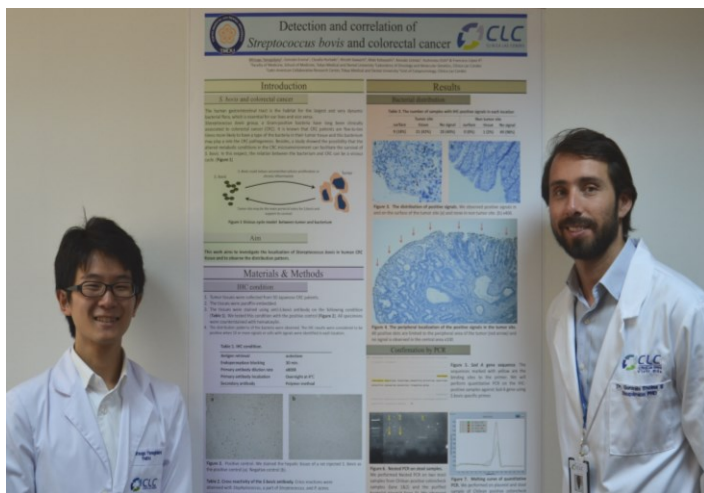
Uyuni塩湖にて

方が儲かるよ。日本帰るなよ。」などと誘惑してくる友人も居ますが、お金の問題は別として、もう少しChileにいられたらな、と寂しさを感じます。

研究の暇を見つけては、南米諸国を旅しました。ペルーのマチュピチュ、チリのアタカマ、ボリビアのウユニなどです。金曜日の実験を終えた夜、かばんにパスポートと着替えを詰め混んでバスに飛び乗りました。ちょっとした休暇を利用して南米屈指の観光地を訪れることができるのは、大変貴重な機会だと思います。長い登山の末に俯瞰したマチュピチュ遺跡、クスコで見た青とオレンジの夜景、アタカマで見た満天の星空、ウユニ塩湖に反射した朝焼け、海拔4,500mで迎えた新年など、一生忘れられない思い出です。最後になりましたが、今回このような貴重な機会を下さった江石教授、生活面でも研究面でも支えて下さった河内先生、小林先生、岡田先生、Jaimeさん、丁寧に実験手法を教えて下さったDr. Gonzalo他ラボの方々に、この場を借りて御礼申し上げます。



ラボのみんなと



指導教官・エンシナ研究員と研究発表会にて



日本語を勉強しているサンティアゴ大学の学生と

編集後記

まるで昨日のように思い出しますが、LACRCオフィスで勤務しはじめてから、もう近く1年になります。オフィスで過ごした期間は、短いものとも言えますが、実際には自分の目の前で、LACRCの先生方の多くの離任及び着任を体験しました。今回は、小林助教の番になりました。“This will definitely be a great loss for our team and we will miss her a lot”. 今後もLACRCスタッフの活動を本Newsletterを通じて、ご報告してまいります。(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 13, March 2014

[発行日] 2014年3月31日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780 Fax: (56-2) 2610 8610
Email: jurrejola@clc.cl